―バスケットボール部―――

□体育会名：関西学院大学体育会バスケットボール部
□創部年：1923年（大正12年）
□2025年度会員数：85人（4 年17人、3 年19人、2 年21人、1 年28人）

□同窓倶楽部名：関西学院大学体育会バスケットボール部同窓倶楽部
＊関西学院同窓会　公認団体
□同窓倶楽部通称：バスケットボール部弦月会
□設立年：―
□会員数：―

1891（明治24）年、米国でネイ・スミス博士によって創案されたバスケットボールを日本に導入した一人に、宮田守衛（関学 OB、宮田満雄・前院長の父君）がいた。宮田は米・スプリングフィールドの国際 YMCA トレーニングスクールを卒業後、神戸 YMCA の総主事として帰任、この競技を紹介したのが1912（大正元）年である。

その後、22年に関学の体育主事として赴任した A.C.ブラッドレイ氏から手ほどきを受けたのが、23年入学の初代主将・広瀬満直であった。当時のメンバーは、テニス・サッカー・陸上の寄せ集め。同期の仲間によって始まったのが、わがバスケットボール（籠球）部の創部となった。コートは原田の森校舎グラウンドの西南片隅の野外であった。その年の第1回関西選手権にはメンバーが揃わず棄権したが、第2回全関西選手権で3位、第5回で早くも優勝した記録がある。

広瀬はその後、33年に日本で初めて米国から招いたコーチクリニックの通訳も務めた。長く OB 会会長を務め、関学同窓会長も歴任。「伝統は、先輩の歩んだ道を踏襲するのでなく、技術は時代と共に進歩するので、やはり精神面のこと。全員が一丸となって、ぶつかってゆく旺盛な気迫だろう」との言葉を残している。

籠球部は26年、運動部（現体育会）に正式加入を認められた。12月には関西学生籠球連盟を結成し、日本の東西を代表する、大学定期戦で最古とされている早大との第1回定期戦が早大コートで行われた。

ただ上ヶ原に移っても室内コートは望むべくもなく、土のコートでの練習だった。しばらく後に、露天の床張りコートになりはしたものの、雨ざらしのため次第に傷んで板が一枚一枚反り上がり、

あちこちでささくれているという危険なコートしかなかった時代でもあった。

明治神宮大会が明治神宮国民体育大会に改称された翌40年、同大会の兵庫県予選で神戸学士倶楽部を破り優勝。本大会には現役・OB 混成チーム「関学倶楽部」で優勝し、初の全国制覇を成し遂げている。

関西学生バスケットボール創成期の基礎をつくったと言われている当部は、戦前から戦中にかけて輝かしい戦績を残し、関西学生リーグ戦や関西学生選手権等を数多く制している。当時は優勝するとチャペルの時間に優勝旗・カップが飾られ、最前列で院長から祝辞、讃美歌で祝福をして貰った時代もあったようだ。

この間、多くの名選手を輩出したが、中でも不世出の名コーチと言われたのが椋本清（33年高商部卒）だった。在学中はコーチと主将を兼任し、後に1年先輩の松本幸雄の要請にこたえて書いた「籠球競技の指導について」と題する原稿が、戦後、遺稿として兵庫県バスケットボール協会誌「兵庫籠球」に掲載されている。

また、波部久太郎、大久保修造は日本代表選手として選抜され、国際大会等で活躍した。第 15 回早大定期戦で初めて勝利し、以後第 17 回まで 3 連覇した。この定期戦勝利の喜びを知った椋本は、戦地から夫人に「今、俺のこの喜びの心を分かちたいと思って之を書き送る」と一枚のハガキを送っている。当時の最長身のセンターでも五尺八寸（1m75）、ほとんどのプレーヤーが五尺五～六寸（1m65～1m70）だった時代で、現代の体格に恵まれた日本人の身長には驚きである。

戦時中、籠球部は鍛錬部の中の競技科・籠球班と位置づけられた。一時は部活動も停止になり、第一次、第二次の学徒出陣が始まり多くの先輩諸氏を戦場に送ることになった。不帰の人となった戦死者は学院の記念碑に名前が刻まれている。暗黒の不幸な時期でもあった。

戦後の部活動復活は戦地からの復員復学に始まった。47年5月、シベリアから戻った八木藤一郎は、復員して1週間にもならない早関定期戦にかり出された、と記録にある。同年8月の岡山・西大寺合宿はまだ米が配給の頃で、夫々が米持参でイモやカボチャが主食という食糧事情であった。現在からは想像も出来ない時代であったが、なお、「灯りは燃え続けて」いた。

戦後、各大学の足並みが何とか揃うようになり、春夏のリーグ戦が行われるようになったのは49年4月であった。

戦後しばらくは物がなかった時代で、シューズも10日使うと底が割れたり布地が破れたりで、それを縫い合わせながら苦労してバスケットボールに取り組んでいた。体育館はなく、主に西宮体育館や神戸・大阪の YMCA 体育館を中心に、阪神間の高校の体育館も借りての練習の日々。それでも当部は、関西の雄として再び名を馳せていた。

51年から60年までの10年間で関西リーグ 5 度の優勝、西日本学生選手権は4連覇を含む6度の優勝を遂げており、まさにこの時期は関学バスケットボール部の戦後の黄金時代だった。特に54年には石塚一郎監督のもと、早大との定期戦に勝ち、第 1 回近畿総合選手権で実業団の雄、松下電器（現パナソニック）を破って優勝。全日本総合では学生2位の日大に勝って、総合5位となっている。

この黄金時代以降は永らく優勝から遠ざかっていたが、スポーツ推薦の無い時代に於いて75年、15年ぶりに奇跡の関西リーグ優勝を果たした。しかし、その後は再び低迷し、2部リーグ降格など厳しい時期が続いた。95年からスポーツ推薦復活による選手補強が奏功し、98年、23年ぶりに関西リーグ優勝、翌99年には38年ぶりに西日本学生選手権を制覇し、古豪復活との賞賛を得て「灯りは消えていなかった」ことが証明された。

95年からは、新たに女子部も発足し、2012年には兵庫県総合選手権で男女アベック優勝を果たし、往年の伝統の復活が頼もしい。13年、創部90周年を迎え、今日まで故人を含めると OB/OG の卒業生は500人余りになる。

牧野久光は日本協会理事、西日本協会理事長、大阪協会理事長、関西学生連盟理事長などを歴任。土肥一雄は高商部を終え、早大へ編入、卒業後に極東オリンピック日本代表選手として出場後、日本選抜チームコーチ、滋賀協会会長などを務めた。澤田修太郎はバスケットボール界の大御所で兵庫県協会初代理事長、大阪協会会長、近畿協会会長などを歴任しながら関学同窓会長、体育会会長なども務めた。

松本幸雄は米国のバスケットボール技術書の翻訳、コーチのための指導書を執筆、多くの

著書や蔵書の全て、中でも、日本で最も古いと云われるバスケットボールの専門書など貴重なものが、現在、芦屋図書館で「松本文庫」として保管されている。日本協会、西日本協会などの理事、兵庫協会理事長も務めた。浜谷次は日本協会、大阪協会、西日本協会などの理事、関西学生連盟の理事長を歴任。岩佐道雄は日本協会理事、近畿協会理事長、神戸ユニバシアード大会役員などを務めた。

資料：

兵庫県バスケットボール協会創立 50 周年記念誌「先賢の跫音」

関西学院大学体育会バスケットボール部 60 年史　CRESCENT60

□バスケットボール部　部史　編集担当者

　　谷　紳一（昭和31年　経済学部）